

-remaining-
のこるもの

-remaining-
のこるもの

Kaori Ohmi

Kaori Oomi



たろうのなやみ

たろうにとっては おおきな なやみでした。

それは、とくいな げーむで ともだちに まけるよりも ころの おくに おもい 「おもい」 でした。

がっこうから いえにかえるまで どのみちを とおったのか おもいでせない、くらい ふかい おもいです。

だれにも このなやみは はなせません。おとうさんやおかあさん、おねえさんにもはなせないのです。

それは、がっこうのことでした。

それは、おなじがっこうの おんなのこのことです。

たろうのなやみは そのおんなのこが きになることです。そのこ と はなしたい、ちかづきたいというきもちなのですが、なぜか、そばにいけないのです。

ともだちのいう、すきだ、というきもちでないとおもいます。

というのは、そのおんなのこは たろうからみると、とても あかるくて、なんでも しっていそう。いちばん、たろうと ちがうのは、こえが やさしいのです。

こえは おかあさんでも おねえさんでもない こえです。きくと、ずっと かげが とおりすぎたような きがするのです。

おもいで

「・・・もうだめだ」とたろうはおもいました。ここ、New York の SOHO Areaを 1 block South 。どこにでもある、deep townで よなかの2じには めつきの わるい おとこたちが こえを あげてちかづいてくるのです。たろうは、ほどうに たおれていたのです。かおのちかくには ちが たまりはじめました。めが きゅうに かすんできて、おとが とおくなってきました。「ここで、おしまいなのか・・・」

とおのく けしきのなかで たろうは こえを ききました。そうです。あの おもいでのかえです。

「・・・ きこえますか？きこえますか？・・・」

そのこえに うながされるように たろうは、

「ええ、きこえる・・・」

といったときに、すべてが みえなくなりました。

すべては おもいでから めが さめました。

こえと そのときの かのじょの め。

でも、それは ゆめのようにも あり、realなものでもあり、たろうには どちらとも わかりません。

さめた めには、 しろい てんじょうが うつりました。

かすかに、 かぜが あるので、もう よるではない けはいです。

からだは やわらかな bedの うえに あるのです。

そして、あのおもいでのかえがしたのです。

わすれたいもの

Agatha Gallo は、 Boston Commonの ちかくの officeに いました。Agathaは、いま この officeでは、 とけいが すでに 10じを まわっていることから わかりました。 Typingするようおとですが、ときどき、「・・・まあ、どうして」という Agathaのこえには どこか きんちょうが あるのでした。

「・・・また、できてない・・・、でも、おかしい。さっきはOKがでたのに・・・」
Agathaにとって、computerは おおきな black holeの ようなもので、いちど はいりこむと できないものでした。じじつ、きょうは その black holeに ひきこまれたのです。

Agathaのblack holeは、どこまでも みえないのではなく、ときどき はんのうが あるのでした。でも、きょうは そのはんのうも ないのです。

「あれが のこると、たいへんな ことになる・・・」
Agathaには、このofficeの まわりの ようすも すでに いしきを こえています。もう、じぶんの こえしか きこえず、officeに だれかが いたとしても、 computer screenだけを みている かのじょには なにも みえないのでした。

「・・・あった、でも、さっき deleteを したはずなのに・・・」
Agathaは、ちょっと、あんしんして、[delete]を clickしたのでした。

「・・・」
なにも、おこらないのです。そう、[delete]をclickしても なにも おこらない。かのじょが みているのは fileのなかみは、 building planの 1つのおおきなroomを えがいたものでした。

たろうの そばには あのおもいで の こえの もちぬしが いました。

「もう、だいじょうぶですよ。にほんじんですよ。」

「・・・ええ。」

「すこし、あたまを うった ようなので、このびょういんで けんさを しておきました。」

と、ちょっと ふあんな かおした かのじょですが、すぐに えがおになって、
「けんさの けっかは あしたわかります。でも、このじょういんに きたときは いしきが なくて。それに 2にちも ねむった ままでしたから。」

たろうは、ようやく、ここが びょういんで、じぶんは けがを して はこばれてきたことが わかったのでした。

「ありがとうございます。わたしは、こやま たろうといいます。お世話になりました。」

「あ、わたし、じぶんを しょうかいせずに いきなり、いろんな ことを いったみたいで すね。」

「Mass Bay Area Hospitalの doctorをしている いずみ かなといいます。たまたま、New York に conferenceにきていて、あなたのじけんを みたものですから。」

「このびょういんも わたしの BSAHの かんれんのところですよ。」

たろうには、おもいでにあるあの やさしいこえの ひとに あえたのです。

たろうは、こえのあいてが、「いずみ かな」ときいたあと、きゅうに sleepyに なってしまいました。

「すみません、もうすこし ねむらせてください・・・」

そうつけるかいなや、たろうは ねむりました。

「・・・たろうさん、たろうさん、きこえますか？」

まだ、ゆめのつづき？ではない。

「はい。きこえます。」

「ずいぶん、よくねむっていましたね」と、いずみせんせいが えがおで はなしています。

「もう、だいじょうぶでしょう。あさって、くらいには このびょういんから たいいんできます。あとで、じむのことを おしらせしますね。」

「ところで、New Yorkの あそこで ぼくは どうなっていたのですか？きぜつしたとおもったあと、おぼえていないのです。」

「わたしが、みかけたときは、かなり、しゅっけつして、みちに たおれていました。だれかに おそわれたというよりも、きゅうに たおれたようです。だから、けんさも しんちょうに したのです。」

「けっかてきには いじょうは ありませんでした。」

きゅうに たおれた、とたろうは、これまで そんなけいけんが ないことを いずみせんせいにつたえました。

このときの しょうじょうが じつは おおきな まえぶれであったのは あとで わかったこ

とです。

Research Lab

Agatha Galloの deleteしようとしていたbig roomは、radio studioのような へやを しめしたものでした。ほかのへやは、3にんがはいれるような ちいさな roomが そのまわりに いくつも あります。English as a second language schoolのようにも みえます。

Agathaが とても きにしているのは、そのspecial roomが、ひとにしられてはいけないもののようにでした。Radio studioなら、Agathaが はたらいている この architect studio (けんちくじむしょ) でも、いくつかの drawingsが あります。でも、このないようが secretな りゆうは、ちいさな へやと このおおきなへやの あいだにある、computer roomに あるようでした。

「・・・なにも はんのうがないわ。」

「そうだ。ちがうdrawを overwriteすればいいのかも。」

ようやく、いいかんがえがあったとばかり、Agathaは、ほかのfilesを しらべて、べつの radio studioを しゅうせいして、overwriteしました。

「どう?・・・いまくいったわ。」

もういちど、fileを openすると、Agathaが いれかえた ものに かわっていました。

ようやく、このさぎょうが おわったのが、よあけまえでした。

Agatha Galloは、だれにも みられないように officeを できるしたくをしはじめました。Early timeだと guardianが くるかのうせいがあるので、であったら、overworkというつもりでした。

さいわいなことに だれにも あわずに、undergroundのparking lotsに いけました。すばやく、じぶんの Firebirdに のりこみました。いつもと ちがって、ゆっくりと、しているひととすれちがわないように、parkingから できるためです。

ようやく、downtownを はずれて、Watertownに ついたころには、あさひが でてきました。それとともに Agathaも さくばんあった ことが べつの せかいのことのように ちいさく なっていくのを かんじました。

ちいさなgardenのある Agathaの いえは、ひとりぐらしには ふつりあいなものがありました。それは おおきな garageです。すくなくとも、くるまは、3つははいります。

そのgarageを remote controlで あけて、Firebirdのengineをとめました。そのparkingしたよこには、それは、あのradio studioにあったもののにたcomputer roomがあったのです。

ききとること

いずみせんせいのせつめいを ききながら、ふと、ながいあいだ、かいしゃやりょうしんに びょういんにいたことを せつめいしていないことに きがきました。

せんせいが びょうしつからでて、こんどは lobbyにある telephoneで かいしゃにでんわをして、いままでのあったじこのことを せつめいました。また、しんぱいは かけたくなかったのですが、にほんの りょうしんにも でんわを しました。

「もしもし、ほくだけど・・・、」

「たろうかい。ずいぶん、ごぶさただね、」と、いくぶん、こえを きくことを たのしみにしていた たろうの ははが こたえました。

「うんまあ、しんぱいかけてごめんなさい。みんなげんきにしてる？」

「こっちは、おとうさんもわたしもみんな いつもとおなじでがんきだよ。なにかあったのかい？」

「いや、たいしたことはないんだけど、ちょっと びょういんにいったから・・・」

「びょういんって。じこでもあったのかい？それでいまはだいじょうぶなの？」

「うん、だいじょうぶだから、こうしてでんわをかけてる。New Yorkで よる あるいていたところ、たおれたんだ。え、そう、だれかに おされてたおれたのではなく、ふっと たおれたみたいで、すこしあたまを うったから、たまたま とおりかかった にほんじんのせんせいが ぼくを びょういんに はこんでくれたわけ。」

「だいじょうぶであんしんしたけど、きゅうにたおれたのもしんぱいだわ。そのせんせいにおれいをしなくちゃね。あめりか だから、わたしは どうしていいかわからないけれど、なにか そのせんせいに おれいをしなさいよ。」

「わかった。そのせんせい、いずみ かなっていうんだ。そう、おんなのせんせいでとてもゆうしゅうで きれいなひと。」

「たおれた げんいんは しらべておきなさいね。・・・でも、へんね。まえも たろうが しょうがくせいのおきに たおれて きゅうきゅうしゃで はこばれたことを おもいだしたわ。・・・」

「それに おどろいたことは、そのせんせいのなまえ。たしか、そのときも いっしょに いた おんなのこが かなちゃんといってたようなきがするんだけど。」

「え。ほんとう？かなちゃんといずみせんせいは おなじひとなのかな？しょうがっこうで どうきゅうせいだったのかな？」

そのとき、じゅわきのむこうの おかあさんのこえが きこえなくなったのでした。

Agathaにとって、このLabはわずらわしいものでした。どちらかという、このようなものをつくりたくもなく、つかいたくもないものだったのです。つまり、ownerでもなく、しじされた とおりに けっかを だすことだけでした。でも、けっかが でないことはしっばいで、かのじよの いのちをうばうことをいみしていました。

こんかいの しじは、とてもかんたんなものでした。しかし、かのじよが、かんがえたことより、じかんがかかりました。しじがあったのも、あらかじめ じかんがかかることを ownerはしっていたかのようでした。

Agathaが このしごとを するようになったのは、Firebirdも、いえも てにいれられるような incomeが やくそくされたことと、どくしんであったことです。どくしんであれば、いつでも しごとを やめられると おもったからなのです。

いのちをうばうというのは、ほんとうのことです。というのは、このしごとを はじめたころ、Agathaのめのまえで、いくにんかが しんだ（ほんとうは、newsでみただけですが） からです。しごとの いらいにんは いつも すがたを みせません。ただ、かのじよの PCに emailを おくってきて、しじを まもると、かのじよのbank accountに feeが やくそくしたがつだけ chargeされているのです。ないようも かのじよの jobやeducation levelを しらべたあとのorderになっていました。

いつでも やめることができるし、orderのないようが とてもたいへんなら skipすることもOKです。でも、つづけてorderを すずめていくと feeも おおくなっていくのでした。

Agathaは、parking lotのよこにある computer roomには ちかづきません。とくしゅな orderをだす ownerが なにも いわないからです。ちかづくと、なにか わるいことが おこるようで、こわいのです。

これまでの しごとは、officeに かくした labの designを しじされたとおりに つくることでした。ほんとうの しごとを するよりも たかい しゅうにゅうが ありましたし、Agathaには はじめての audio boothのdesignは excitingでも ありました。

Ownerは とても このぶんやに くわしいということが、そのしじからもわかりました。Agathaは、きのうの よるおそくまで design printsを deleteすること (originalは すでに、emailで ownerに おくってありました。) にてまどったことは、すこしきになりました。Showerを あびて、breakfastを ゆっくりたべて、CNNを みるころには、いつもの day-off (おやすみ) があるだけでした。

「…、つぎはInternational newsです。まず、こちらをごらんください。これは、にほんの high-techには めづらしく、ひとの てさぎょうで、 baking accountのちょうさを しているところです。Computerのしゃかいでどうしてでしょうか？」

「…、ええ、さくじつまで、computer systemは、せいじょうでした。ところが、けさ、bankにいくと long quesです。Systemが downしたようで、おかねもおろせません。」

「『にほんのぎんこうかくしゃは、このじこは、computer system and networkが おこしたもので、げんざい、げんいんを たんさくちゅうです』とほうくしていますが、ふっきゅうはいまのところわかりません。」

というこえが きこえたしゅんかんに CNNのがぞうは きえました。

Blackout

たろうがきいていた、おかあさんのこえも、AgathaがみていたCNNのえいぞうもにどどきこえたり、みたりできないものになりました。

そうです。USAでは、おおきな blackoutがあったのです。それは、Northeast Blackout of 2003のものよりもおおきなきぼでした。つまり、USAでは、すくなくとも 9 hoursはかんぜんにpowerにたよったenergyがつかえなくなったのです。

にほんの bank panicもおなじじかにおこりました。

たろうの hospitalも Agathaの livingも blackoutです。でも、まだ、Agathaのところは daytimeだったので、しばらく、なにがおこったのかはわかりませんでした。おとがなくなったようにおもえたのです。

USAやAsiaだけでなく、Europeでもおなじじょうたいになりました。これは、いままでの blackoutとちがうのは、1つのくにでおこったものではなく、でんきや、telecommunication, Internetなど、つながったところにおこっているようでした。

Blackoutでこのちじょうのすべてのひかりがうしなわれたのではありませんでした。たしかにおおくのものがうしなわれたのもじじつです。Hospitalでのかんじゃもおおきなひがいがありました。なくなったひとのおおきはてあてができなかったためでした。くらくらしたへやでけがやびょうきになったり、signalsがつかえないためにこうつうじこをおこしたりしたものでした。

Hospitalではいつもより、うめきやさけび、なきごえやじゅもんがきこえはじめました。

たろうの hospitalでも、おなじです。でも、たろうは、blackoutのことよりもじぶんがこの bedにいることやこどもんころから、きおくがきえてたおれることのほうが、おそろしいものでした。かなせんせいは、あのあとあられられません。きっと、この blackoutでとてもいそがしいのでしょう。にほんのおかあさんのこともきになります。

Blackoutはだれもが、どんなにながくても1にちたてば、recoveringするとおもっていました。しかし、half dayたっても nursesや doctorsもじょうたいがかわらないことにおかしさやふあんをかんじはじめました。そのとき、back-up powerが workしてどこもあかなくなったのです。だれもが、これで終わったのだとおもいました。しかし、終わったのではなく、はじまりだったのです。

Omen よちょう

Blackoutのあとのことは、すべて どうじにおこり、すべてここにかくことができないないようです。それだけに おおくのことが いちどに おこったのです。まず、powerが なくなったのは temporaryにrecoveringしたようにみえたのですが、じつは、recoveringしたsystemやinfrastructureがおおきなもんだいをかかえていたのです。たとえていえば、おおきなじしんがきて、いえやたてものがこわれたことが、blackoutです。そのあと、でんきがrecoverしたあと、それまで、こしょうしていたpower-lineにpowerがもどると、きかいにshortがおこって、fireをおこしはじめます。じしんのあとに おおきな かがおこるのも、recoverしたあとに よくてんけんしないで、power-onしたためにです。こんかいのblackoutもおなじでした。もっとももんだいなのは、automatic recoveringで、systemが troubleをもっている、どうささせることになったのです。そうです、そこでおこるのは、panic and chaosしかありません。しかも、このblackoutは しぜんにおこったものやじこでなくて、だれかがしかけたものであるなら、このこんらんは なにを もたらすでしょうか？

たろうが、じぶんの きおくが なくなることから、まわりでの さわぎに きがつくまではそんなにじかんは かかりませんでした。というよりも、じぶんの きおくがなくなることよりも、まわりがnoisyになったからです。Hospitalでは、どこでも panicがおこっていました。patientだけではなく、doctorもstaffも こんらんをしていたのです。Power recoveringのあとは、なきごえやさけびごえがふえてきました。おなじへやにいたpatientのようすがおかしくなったのもrecoveringのあとでした。たろうの wardは、Neurologyだったので、けがやきずではなく、ちりょうも medicineは tabletsだけでした。そのpatientも、いつものtabletだとおもってのみ、しばらくして くるしんだのです。しばらくして、doctorやnurseがきたときには、もうなくなっていたのでした。げんいんは、tabletsだと、doctorがはいっていたtabletsのふくろをみても、しょほうは まちがいのないものです。たろうは、そのpatientがのんでいたtabletsにぎもんをもちました。というのも blackoutするまで、すこし おはなしをしたとき、かれが のんでいた tabletが、いまのこっているものどちがったcolorだったのです。そのことを、doctorにも はなしましたが、panicが まだつづいているなかで、とりあってもらえなかったのです。たろうじしんも medicineがありました、ようじんして、いぜんのものど ひかくしました。ふこうなことに しろいtabletのちがいは そとからではわからないものです。でも、なにかがおおきくかわっていることが かんじられました。

Agathaの いえでも、よるになると、blackoutしたことがわかり、TVもradioも、もちろんInternetもつかえないじょうたいでした。ふあんです。Agathaの いえのまわりは あんぜんなところでしたが、Firebirdなど はでな ことがまわりの ひとたちに しられていることから、かならずしも おんなが ひとりで すんできる いえは あんぜんではありません。Blackoutしたあとでも、あかりが きえないへやがあることに Agathaは きづきました。そう、どのいえにもあるparkingです。よるの くらさが ひろがるなかで、parkingの ひかりは あかるいものになりました。Parkingが あかるいのは、そのいえも emergencyの lightsやfood stocksがあって、BBQ setsやlantern、candlesを つかって いるからでした。でもAgathaのいえはちがっていました。そう、Labのなかは、いつもとおなじように lightが ついていたのです。Agathaがようすを みにいくと、まっていたかのように voiceがきこえました。「・・・ようこそ、Agatha。なかにはいりなさい。」

The equation ほうていしき

The Netherlandsの Utrecht Univ. (Universiteit Utrecht)のProf. Van Del Maarは、こまっていました。だいがくの こうぎの あいまいにおこった blackoutも じつは、よそうの はんにあったものでした。

すぐに research labにもどった Prof. Maarは、これまで よていしていた こうどうを とることにしました。このげんいんであるものにたいして、tracking systemをうごかすことです。

Blackoutしたあとも、co-generatorのthanksで、Profのlabは もんだいないじょうたいでした。

こまったことは、Prof. Maarの かせつを publicationすることでした。かせつは、Electronic physicsのtheoremをかえるようなないようで、おおくの Nobel prizeを だしたUtrechtだいがくでも じゅうようなことでした。

かせつを たしかめることが だいいちであると、Prof. Maarはもちろんかんがえたのですが、それにはおおくのpartnersがひつようです。すぐに blackoutで れんらくできるじょうたいではないので、これまで researchをいっしょに すすめてきた、Philips research Centreにいる、Eliasに、とくしゆな telecommunicationをすることにしました。それは、よそうした blackoutでも communicationできるように designしたものです。(これも Prof.MaarとEliasのco-workのけっかです。)

Labで、Prof. Maarは、emailをpostするように computerにむかってmessageをtypingします。

"Dear Ron Elias:

きもきづいているじょうきょうになったために、phase1のほうほうで、きみにこのmessageを かいている。Centreのそうちで これがよめたら、わたしの かせつのいちぶは ただしいことになる。そして、どうじに、もっとも さけるべき じきがせまっているのも じじつになったことを いみする。

このじたいをpublicにするまえに、すぐにおこないたいことは、phase2でかんがえていたtrackingのぶんせきだ。いま、こちらから、trackingをすでにしているので、tracerをきみのほうで つくって、monitorしてほしい。へんかがあれば、このmessage addressに しらせを。

かみのごかごが あらんことを。

Van Del Maar"

Prof. Van Del MaarがRon Eliasにphase1というほうほうで、messageをおくったとどうじに、たろうにも irregularな feelsが かんじられたのです。Hospitalは、もとに もどっているように 見えます

でも、blackoutのあと、なにかが かわったようなのです。たろうにも なにか かわったかは せつめいできません。

いずみ かな せんせいと はなしが できたのは、blackoutがあったひから2 weeksたったひでした。なにげなく、びょうしつの まどからそとをみていたたろうに、あのこえがきこえてわかったのです。

「あのじこいらい、たいへんだったでしょう？いかがですか？」

「ええ、わたしは だいじょうぶですが、このwardでも、あのじこでなくなったひともいて、たいへんでした。びょういんが、panicになるとおもっていませんでしたからね。」と、たろう。

「あのじこで、せんせいも、busyだったでしょう？」

「BSAHにいたときに じこに あったので、そのたいおうで たいへんでした。でんきが ないと safeでないことは あたまでは わかっていたのですが・・・」と、いずみせんせいには、そのとうじのimageが よぎったようでした。

「ところで、たろうさん、いや、こやまさん。」

「はい」

「あなたのけんさのけっかですが、negativeなものはどれもないため、せいじょうだとしかはんだんできません。でも、きおくが なくなることは、どれも せつめいがつかないのです。」と、いずみせんせいはそこで、ことばをきりました。

「じつは、あなたの しょうじょうを さらに BSAHでresearchしてみたのですが、ひじょうに きょうみぶかいcase studyといっちしたのです。くわしいことは せんもんてきなので、overallだけせつめいします。」

「そのcase studyでは、とくていの audio signalだけかんじることができる、じょせいの せいしんか かんじゃのれいです。そのなかで、あるsoundsを きくと、そのかんじゃは、とつぜん、sleepingを はじめ、そのsoundsとはべつのおとをきくと wakeするのです。」

「こやまさんが、いぜん、はなしを しているときに たおれたということはありませんか？」

Prof. MaarとEliasとのやりとりは、さいしょは technologyにかんするものでした。Blackoutがおこった あとでも、telecommunicationが できるそうちやsystemで、analysisが おこなわれるにつれて、Eliasが つくった tracerが いくつかの resultsを だしてきました。そのおおくは、trivialで ありましたが、そのなかで、remarksできるものがありました。おおきな はっけんは、このblackoutが いとしたものであるというかせつを こうていしたものでした。つまり、

だれかが、このげんしょうを よそくしたうえで、blackoutを おこしたのです。だれが、おこしたのかは、いまのtracerでは identifyできませんでしたが、それが いつから はじまったのかは、おおよそ、identifyできたのです。

Blackoutがおこったことは、そのときよりまえに じゅんびされたというfactがじゅうようです。つまり、じけんを おこした はんにんは、それまでのあいだに なにかを うごきを していることがあるからです。Ron Eliasのtracerは、それを たんねんに Internetやtelecommunicationなどのじょうほうがあつまる、publisherやnews mediaのdatabaseに accessしてしらべるものでした。

Prof. Maarは、The Netherlandsから おおくの きょうりょくしゃをえて、USAのNSAやCIA、EUにあるintelligence databaseもaccessできる、systemのこうちくのきよかをえたのです。でも、normalな accessでは きよかされないので、botとよばれる、remote search engineをつかって、おおくのsystemに のこっている cash dataをつかうものでした。Internetでは、botの1つであるcrawlerというぎじゅつをつかって googleやyahoo、MSNが searchをおこないます。それを、Prof. Maarは、かなりおおきくしたものをつくったのです。Prof. Maarのけんきゅうは、もともと、cyber-terrorismから protectするためのmilitary studyでした。おおくのじょうほうを cyber-attackからまもるためです。Blackoutのように power-supplyを ねらうことは、cyber-terrorismでは ふつうのtargetです。もんだいは、Prof. Maarのsystemが attackの preparationを けんしゅつできることが おくれたことです。さらに、Eliasのtracerも、blackoutの attackを trackingできなかつたことです。このてんで、systemは ちからぶそくでした。あるいは、はんにんが、Prof. Maarのうごきを していて じぜんに けんしゅつできないように したのかもしれない。どちらにしても、さいあくの blackoutがおこったのです。ただ、ふこうなことに、Prof. Maarは、simpleな cyber-terrorismを かていしたのではなく、そのattackそのものを なくしてしまう、げんりをみいだしたのは、じつは、backoutのfew weeksまえのことだったのです。

Backoutがおこったのが、2008ねん1がつ15にちでした。Prof. Maarのteamが、すでにかつどうしていたにもかかわらず、けんしゅつできなかつたのです。ただ、わずかなinformationだけで、そのfactをとらえられたのでした。それは、USAの ひがしかいがんのものでした。

Overwrite うわがき

Prof. Van Del MaarとRon Eliasが、the Netherlands でひそかに tracerで blackoutを おこす げんいんについて ちょうさを はじめたころ、Bostonにいる こやまたろうは、あのおとを きく こが だんだんと おおくなっておることに きづいてきたのです。さらに、きを うしなうことも まえに ましてふえたのでした。

いずみ かなせんせいは、たろうと べつの caseを ひかくして 1つだけちがうことに きづきました。たろうのばあいは、おとを きいて きを うしなっているあいだ、ぜいじょうに あたまが はたらいっているのです。そこが せいしんか の べつのかんじゃとちがうのでした。つまり、たおれているときは、たろうは いしきをもっていて げんじつに ちかいゆめを みているような かんかくを もっていることがわかりました。もんだいは、このどあいが ふえると ゆめか げんじつか わからなくなり、しんこくなことは ねむれない じゅうしょうの ふみんしょうに なることでした。

かなせんせいは、たろうに たいして このしょうじょうを なおすためには おとを きく ことをさけるしかないことは わかっていましたが、それが どういった pathで たろうに と うたつしているのかが わからず、さらに それが どんな おとなのかも identifyできて いないことでした。

-remaining- のこるもの

<http://p.booklog.jp/book/33262>

著者 : [Kaori Oomi](#)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kaorioomi/profile>

©2006-2009 Kaori Ohmi ★This includes the story that Kaori Ohmi has published from 2006/09/26 through 2007/05/09 on her weblog:

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33262>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33262>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.